

イエスはなぜ十字架刑で死んだのか

1. それは避けられないものだった

1-1. 宗教的理由

a. イエスは神殿を冒瀆している

当時ローマ帝国に支配されていたユダヤにおいて、ローマからある程度の自治権を与えられ、神殿を管理していた祭司長をはじめとする貴族階級の人々がいた。

民衆は重い税に苦しめられ貧しい境遇に置かれながらも、彼らは世界中のユダヤ人に課した神殿税や、農民に貸した土地の代金、神殿でのいけにえの動物の法外な売り上げなどを手にしていた。

このようなことからイエスは、「あなたがたは神の宮を強盗の巣にしている」と非難し（マルコ 11：17）、またご自身を「神殿より大いなる者」と主張した（マタイ 12：6）。

そうして彼らはイエスを殺そうと画策し始めた（マルコ 11：18）

b. イエスは律法を守らない

モーセ五書に記された律法ならび、後で付け加えられた口伝律法を厳格に守ることを民衆に教えていたパリサイ派は、イエスが律法を守らない、特に安息日の決まりを守らないことを批判した。

またパリサイ派が「社会のクズ」「罪人」とみなしていた、律法を厳格に守らない（守れない）人々をイエスが受け入れ、親しく食事をしていることを批判した（マタイ 9：11）。

しかしイエスはパリサイ派を偽善者と呼び、神の教えで最も大切な「愛とあわれみ」をないがしろにしていると指摘し、パリサイ派よりも彼らのほうが神に受け入れられると説いた（マタイ 9：13、23：23）。

このためパリサイ派もなんとかしてイエスを陥れようとした。

c. イエスは自分を神と等しくした

イエスは人々の病をいやし、罪の赦しを宣言し（マルコ 2：5）、自分を神と等しい存在とした。

最終的には、イエスがご自身を旧約聖書で預言された救い主（メシヤ、キリスト）であり、神と等しい者であると主張したことが決め手となり、神を冒瀆する者として死刑を宣告したのである（マルコ 14：61-64）。

1 - 2. 政治的理由

ローマ帝国の支配から武力によって独立しようとする勢力が、たびたび暴動を起こしていたため、イエスが活動していた当時、ユダヤはローマの直轄領としてローマ総督ポンテオ・ピラトが統治し、エルサレムにはローマ軍が常駐していた。

そんなときにイエスが現れ、人々はイエスを王として担ぎだそうとしていた。またイエスがメシヤならば、きっとローマから解放してくれると期待する人々が多かった。

しかし祭司長たち支配階級は、自分達の立場を維持するためにもイエスを葬り去らねばならなかった（ヨハネ 11 : 47-48）。

祭司長たちから裁判を委ねられたピラトは、3度もイエスの無罪を宣告したが受け入れられず、このまま暴動になれば自分の立場も危うくなるため、死刑判決を下した。

こうしてイエスは、正義と愛を貫き通した結果として、指導者たちの恐れと自己保身のゆえに十字架刑は避けられなかった。（マルコ 12 : 14）

2. 自ら死に向かっていった

彼は自分が殺されることを予見し、何度も弟子たちに語った。（マタイ 16 : 21）

そして自ら危険なエルサレムに向かっていった。

彼は自分の死が人々のためであることを知っていた。（マタイ 20 : 18、ヨハネ 10 : 11）

裁判では彼は一切弁明しなかった。（マタイ 27 : 14）

3. それは昔から預言されていた。

キリストの犠牲の死は旧約聖書の中に断片的に預言されていた。

イスラエルがエジプトから脱出するとき、小羊の犠牲と血が必要だった。

罪の赦しのために彼らは小羊を捧げることを定められた。

特にイザヤ書 53 章には、人々の救いのために苦難の死を遂げる人物が預言されていた。

4. それは私たちのためだった

4-1 愛のゆえに

神の愛を表すため（ローマ 5：8）であり、さまよう羊のためにいのちを捨てる愛（ヨハネ 10：11）、友のためにいのちを捨てる愛（ヨハネ 15：13）であり、また自分を十字架につけた人々にさえ向けられた愛（ルカ 23：34）であった。

4-2 私たちを死から解放するために

神の愛が分からなくなった私たち罪人を救うための身代わりの死（マタイ 20：28、マルコ 10：45）であり、復活によって死とサタンに対して勝利し、私たちを罪と死の法則から解放（ローマ 8：2、ヘブル 2：14, 15）するためだった。

神が人間となり、人間の代表としてその罪を引き受けてくださったのである。

5. 誰がイエスを十字架につけたのか

- ユダヤの指導者たち
- 宗教家たち
- 扇動された群衆
- イエスを見捨てた弟子たち
- そして、彼らと同じ罪を持つ私たち！

参考：「イエスとは誰なのか」マイケル・グリーン